幼児の教育　第94巻　第２号　平成７年２月１日（毎月１回１日発行）昭和23年４月15日第三種郵便物認可　ISSN0289-0836

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1995

2

お茶の水女子大学
平成
7. 1. -9
受贈
附属図書館

第94巻　第２号　日本幼稚園協会

リズム保育12か月
—手あそび・ゲーム・オペレッタ—

鈴木みゆき 編著

保育をパワーアップ
行事からオペレッタまで
CD5巻に総編集

■CD５巻セット（解説書付） セット定価12,500円（本体12,136円）
■解説書（B５判 216頁） 定価 2,500円（本体 2,427円）

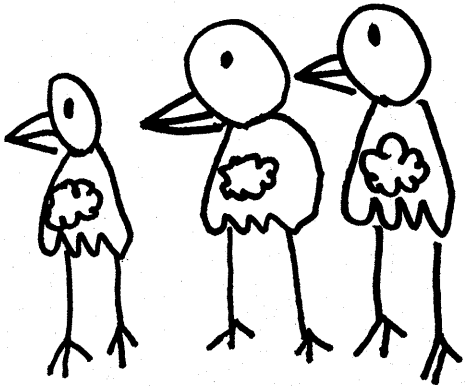
- 日常保育、行事にすぐ活用できる画期的リズム保育資料
- CD５巻と解説書（１巻）をセット。解説書には日々の保育を演出する際のヒントとアイデアを４月から月ごとに月案、日案、楽譜、活動例で構成。
- 行事に役立つあそびやゲーム、オペレッタには、楽譜はもちろん振りつけを分かりやすく図解。初心者からベテランまですべての保育者を対象。
- CDの音源はすべて音楽性豊かなフルオーケストラを使用。
- CD５巻は年間のすべての保育に役立つよう104曲を厳選。
- 誰でも知っている曲、新しく発表した曲、新曲のオペレッタ（お話はよく知られた童話）など盛りだくさんの内容。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育

第94巻　第２号



幼児の教育　目次

——第九十四巻　第二号——

子供讃歌……（4）

〈巻頭言〉実践の記録を考える……角尾　和子…（6）

大きくなったKくんと遊んだ日に……津守　真…（9）

家庭科教育の男女共修をむかえて(5)

生活の変化と家庭科教員養成の課題……柳　昌子…（14）

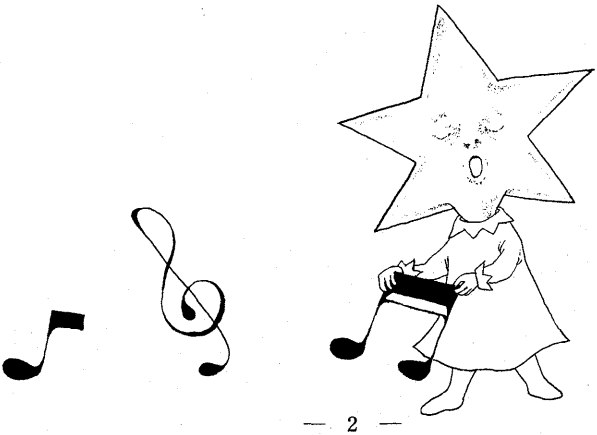
特集〈こだわる〉

こだわりと情緒……藤原　正彦…（22）

小さなものへの視線……森下みさ子…（27）

こだわりにこだわる……田中三保子…（30）

© 1995
日本幼稚園協会



『平家物語』にみえる一つの話をめぐって……山添　昌子…（35）
子どものこだわりと保育……大橋利恵子…（38）
こだわらないことへのこだわり……中村　憲治…（43）
日々の保育の狭間で……矢萩　恭子…（47）
子どもたちへのまなざし(11)
フックト　オン　クラシックミュージック……松井　とし…（52）
ある日の育児日記から(50)……佐藤　和代…（54）
ラオスの子どもたち……インタヴォン・チャンタソン…（55）

表紙・松永　潤二／扉題字・津守　真
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット・彌永たたえ
編集委員・本田　和子／田代　和美
桝田　正子・田中三保子
編集部・大沢　啓子

子供讃歌

ラオスの子どもたち

▶遊ぶ時も子守りをしながら

◀ベトナム国境近くの村の道路沿いで、自作の瓜を売る子どもたち。あまり売れない

▶お母さんのお手伝い

〈巻頭言〉

実践の記録を考える

角尾　和子

逞しさに驚いた話

昔の教え子I氏（フリーカメラマン）から聞いた話である。彼は小学生の頃からアフリカのトンブクトゥに憧れていたそうで、最近の二十数年は日本とアフリカを往来して仕事をしている由。

先頃TVの仕事でセネガルからマリ・ニジェール・チャドへ、生きた山羊とミネラルウォーターをジープに積んでかけた時のこと。セネガルで九歳くらいの子どもが「何でもするから、手伝わせてくれ」「お金はいらない、食うものだけ食わせてほしい」というので雇入れた。その子は洗濯をしたり、山羊を殺してその肉を捌いたり、身の回りの世話を全部やってくれていた。それがある日突然に、「今日でお別れだ」という。アフリカの中央部ニジェールへ着いたばかり。理由は「よいボスを見つけたから、自分はここで生活する」

という。ボスは砂漠の中に捨てられた車を拾って、ナイフや鍋を造ったりする人という。「あとは元気でいってくれ。身体に気をつけてな」の言葉を残して去っていった。残された大人たちは励まされたものの妙な気分であったという。

聞いた私はビックリして、改めてその子の年格好などを聞き直し、自分の力で生きるその逞しさにすっかり驚嘆していろいろ考えさせられてしまった。

共生は理解に始まる

私達は、アフリカの各地について新聞・TVの報道で多くの情報を得ている。その情報が報道する人の恣意的な切りとりであったとしてもかなり広範なものである。しかし先の話に登場するような逞しく生活する子どもの事、そのような生き方を包含する彼の地の社会環境のことを、私は寡聞にして知らなかった。然しI氏が物語るとき、子どもの姿を想像する。そして同じ地球上に生きている人間を実感する。

文明の機器は地球の裏側も映し出すし、宇宙へ飛行することもする。一方で文明が進んで困った問題も数多く指摘されている。進歩に役立てた資源は程無く枯渇するのではないかと危ぶまれて久しい。地球にすむ様々な生き方をする人々との共生こそが、世界を平和へ導くものであると思う。お互いの理解こそ、その第一歩であり、お互いの人間生活まるごとを理解しあう必要に迫られている。そのためには一人の人間を中心にする、情報のとり方や記録・報道の在り方が工夫される必要があるのではないだろうか。

実践を物語様式の記述で

私は、小学三年から六年までと、四歳の幼稚園児から小学六年まで、同じ人々を持ち上がる機会に恵まれたことがある。その体験の中にはあの子

この子の生活の物語がある。物語の経過を辿ると、そこには心躍るエピソードが満ちている。しかしそれらを記録に綴り残すことがためらわれて、今日にいたってしまった。医師のカルテに似た思い、否それより教育の営みは教師が中心という潜在的な信念がためらわせた。つまり子どもの生活を中心に書き綴る意義を自分自身認めていなかったと今反省している。

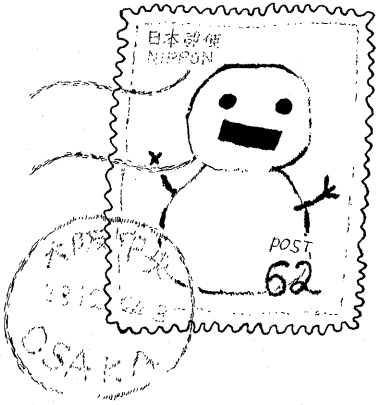
学生と保育研究に取り組むとき、子どもの側からの記録が欲しいとつくづく思う。かねて『保育の体験と思索』[1]に出会い、近頃『ウォーリーの物語』[2]を読んで、保育や、子どもの世界を、物語の様式で記述し省察する意義を今さらに感じている。

（川村学園女子大学）

〈註〉

(1)津守真『保育の体験と思索』大日本図書

(2)ヴィヴィアン・ペイリー著、卜部千恵子訳『ウォーリーの物語』世織書房



大きくなったKくんと遊んだ日に

津守　真

Kくんは、養護学校高等部を卒業して、久しぶりに私共の学校に母親と一緒に来た。病気で入院したと聞いていたが、門を入ると、すぐに砂場に走って来て、砂の中に座り、手で砂を持ち上げて落とすのを何度も繰り返した。六年前に小学部にいたKくんは、毎朝学校に来ると、同じように砂場で砂を持ち上げては落とし、体中水と砂にまみれて長時間遊んでいた。

体の大きなKくんが砂場にきたので、それまで砂で遊んでいた幼稚部のJくんは、砂場をはなれて、水道のホースで水を出し始めた。そうすると、Kくんも水道にきて、Jくん

のホースをとる。Jくんは一瞬びっくりする。Kくんがバケツで水をくみ出すと、Jくんもバケツで水をくみ出して、水を空中にまく。見ているとどちらも海の波のイメージである。こうして取ったり取られたりしながら、私はその間に入って、子どもたちの間の調整に追われた。一時間近く奮闘した。Jくんが去ると、Kくんは、砂場にねそべって、じっくりと砂をいじり、水場に来ても落ち着いて砂で遊んでいる。前半のダイナミックな活動とは異なり、静けさがある。十二時頃になって、着替えようと何度か予告したら、間もなく二階に上がって来た。

私はこれを付き合いながら、Kくんが小さかったときのことを考えた。この子の砂と水のやり方の本質は変わっていない。ただ、あのころはもっと感覚的だった。今のほうがイメージがあるみたいである。今、週の半分過ごしている千葉県の家の近くの海のイメージと共通なのではないかと考えた。イメージは、その場面だけの直接感覚ではなく、違った場面と重ね合わせて見いだす共通性の意識である。同じ場所で、似通った遊びをしていても、彼の中で起こっていることは違うだろう。そして、小さい子どもがそばにいるので、私はいろいろと口をだすのだが、それを聞いて、自分の行動の仕方を変えている。

Kくんと付き合っていると、私のジーパンもシャツも水と泥だらけになる。小さいときにこうしてすごした場所に来ると、身体は大きいのに同じことをするから、連れて来るのが億劫でしょうと私は母にたずねた。母は「いえ、そうじゃないんです。水と泥をするの

は、この子にとっては呼吸するのと同じようなものなんです。一日のどこかでやらなければ気が済まない。都会の家の中だけでは一週間はもたないから海辺の家に行くんです。水と泥をやったあとは、静かに家の中で音楽を聴いて過ごします。学校だと子どもが部屋に出入りして、静かに過ごすことができないから、小さい子が一緒の学校は、この子に向かないんです」と言った。

いまから十二年前、Kくんが私共の学校に来たとき、彼は、私が手に渡したビーンボールを床に落として、見向きもせずに走り去った。何度も渡しては落とすことを繰り返した。そのとき私は手にもった物を床に落として見向きもしないのだから、この子は虚空の中をさまよい走っているのではないかと思った。それほどに、この子の存在感が不確かなのだろうと考えた。それならば、何度でも私が拾ってしっかりとビーンボールを渡そうと思った。そうしている間に、Kくんは私を見て受け取るようになった。この行動を、こんなふうに解釈するのは少し無理かと思いながら、私は、考えたことを思い切って母親に話した。母親は、今まで彼の行動を意味あるものと思って見たことはなかったと言った。

その当時Kくんは、体中にシャワーでお湯をかけ、砂の中に身体を横たえて遊んだ。二歳半までは普通に育っていたKくんは、あるとき手術の後遺症で障害を受け、歩行も言語もなくなり、ついに全く話さなくなってしまった。その間のことを想像すれば、今までで

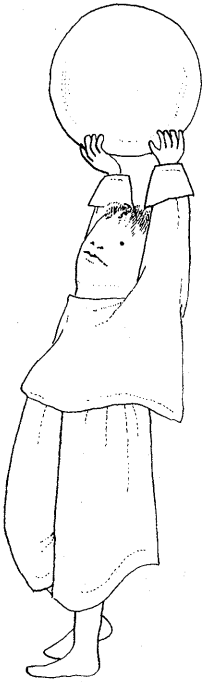
きていたことが日毎に失われていく体験で、子どもにとってはそれはどんなに大きな喪失感だったろうかと思う。自分の存在が根底から失われたように感じたであろう。水と砂を身体全体にかけることをはじめたとき、彼はその触運動感覚によって直接に自分の身体の存在を確かめていたのだろうと思う。もしも水と砂がなかったならば、この子はみずからの存在の確かさを取り戻せなかったかもしれない。母親が、この子にとっては水と砂は呼吸と同じですと言ったのは、それが存在を支えるものだったことを示している。

高等部を卒業した年齢になって、身体も大きな人が、公園の砂場でこうして遊んでいたら、周囲の人達は、奇異に感ずるだろう。でもそういうことはありうるのである。二歳半まで利発に育っていただけに、一夜のうちにすべての能力を失ったのを見た親の、そのときの気持ちが何十年後にまでつづいても不思議はない。しかし、悲しみだけでとどめてはならないと思う。障害を受けた子どもがこの社会に一緒にいるからこそ、私共の社会は健全なものとなるという人生の大きな真理を再認識したい。健康な者だけの社会だったら、それはうるおいのない偏った社会である。

これを書いていたとき、私は秋山さと子さんの遺稿集『永遠の子どもたち』（法蔵館一九九四）を読んでいた。その中で、「傷つけた者がまた癒す」という古代の神話的主題

に言及し、「毒が薬として使われ、また薬が毒ともなるように、病気そのものが明確に薬、または治癒としての権威を与えられている」「神話的な領域では、治癒の可能性はただひとつだけ、すなわち、自分自身が病み傷ついた神が個人的に介在することで行われる」（p・108）ことが語られていた。このことを根本的に考えさせてくれる。

（愛育養護学校）



家庭科教育の男女共修をむかえて（5）

生活の変化と家庭科教員養成の課題

柳　昌子

はじめに

家庭科の役割を一言で表現するとすれば、主体的な生活者の育成ということである。日本家政学会によれば、生活者には生産者プラス消費者の意味があり、プロシューマーと英訳されている。家政学や家庭科教育学で生活者という用語を頻繁に使用するようになったのは、生産者主導の物中心主義、あるいは経済優先の効率主義から脱して、生活を営む側から生活文化を創造するとともに、その担い手を育成する上で、生活者という用語が相応（ふさわ）しいと考えられるからであろう。

高校の家庭科が男女共修になったということは、このような生活者の育成に男子高校生も加えられるようになったということである。その経緯や小、中、高校の教育実践はすでに報告されているので、ここではそれとは別の視点から述べてみたい。

一、生活をとりまく便利な環境

なぜ、今、家庭科の共修かということについて私なりの整理をしておきたい。「お手伝い」をしたら賞賛され、もっと、もっとと促された時期を過ぎると、「受験」と「部活」の切り札の前に親子ともども「お手伝い」に無関心になる。よく識者から現代の家庭の教育力は衰退していると指摘されるが、実際には教育費の支出や親の教育的関心は、「現代」以前に比べてはるかに高い。にも関わらず教育力が衰退しているというのは、家庭が自身の担うべき教育の分担に力を入れていないという点への批判に他ならない。多くの場合支払われる教育費も教育的関心もともに、家庭が担うべき分担に対してではないという訳である。

以前はそうではなかった。這えば立て、立てば歩めの親心。これは幼児の成長を待ちに待つ親心を表現したものである。親たちは一つの課題が達成されると次々と新たな課題を示し、子どもがそれを達成していくことを喜び願う。

このような課題の中に、いつ頃からか身近な生活処理技能の育成のための教育、つまり「お片付け（自分の身の回りの整理整頓）」や「お手伝い（家事参加）」が、またそれと並行して家業を継ぐための、あるいは糧を得るための労働教育も含まれた。一方、家族の間や近隣間での付き合い方など社会的能力についても、親たちは細かに目配りした。しかも到達度の評価基準を次第に高めながら練習を繰り返させ、やがてその社会の中で生きていけるような一人前の労働者や生活者として育て上げていった。親たちのこのような活動は、半世紀前まではわが国の社会で普通に行われていた。以前と比べてという場合の以前とは、このような時代のことであろう。

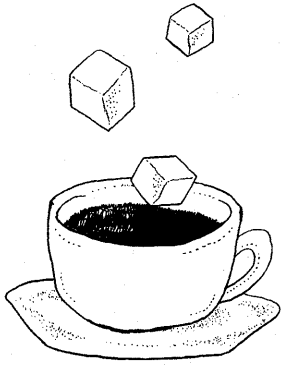
現代は、自給自足的な社会のように衣食住を自分自身で、あるいは身近な補助者の手を借りて賄わなければならないという状況ではなく、一人立ちする時もそれほど覚悟を必要としていない。よほどの田

舎でない限り、便利（コンビニエント）な生活関連の店々が昼夜分かたず営業しており、いわゆる「家の手伝い一つしたこともない人間」でも、一人になった翌日から難なく住んで着て食べていくことができる。そこに「習わなくても生活できる」という意識が生じる。すなわち幼い頃から家庭でしつけられなくても、また、学校でわざわざ学習しなくても、何の不便もなく生活できるような気になる。男子だけでなく女子だってそう思うだろう。

二、家庭科の役割

しかしそれはどのような「生活」なのだろう。社会科や国語など学習しなくても暮らしていけると言うのと同じことで、それは習わないで暮らせる程度の「生活」に他ならない。カード破産、育児ノイローゼなどに陥る状況を見てみると、何とかなると始めた生活が必ずしも巧くいくとは限らないことがわかる。高度な商品化社会の中での商品選択、錯綜する膨大な情報の中での意思決定、原料や添加剤、製造過程のわからない食べ物など、暮らしの仕組みはかつての社会とは比べものにならないくらい見え難く、また複雑になっている。現代では、知らないで生活するということは、自分の命を縮め家庭を崩壊させるだけでなく、他人を傷つけ自然を破壊させる可能性をもつということである。

自立した生活者というのは、これらのことを知



り、適切に対処出来る能力を有している者のことを指す。家庭科がその能力を養成すると言えば、変動の少ない時代の家事・裁縫のイメージとはかなり違うことが理解されるだろう。そのような家庭科の男女共修である。

三、技能学習や実用主義批判の再検討

共修になって具体的な実践報告がなされるようになり、いくつかの課題が出てき始めた。一方では家庭科は物作り教科ではない、科学に基づく教科だという主張のもとに、生活の原理や原則を理解させるためと称してやたらと実験が繰り返されたり、経済学や法学や社会学のテキストなどから引用・抜粋した資料が配布され、生活問題や社会問題の講義が行われたりしている。他方には男子が喜ぶからという理由で、彼らの機嫌を取りながら毎回調理実習を行っている教師がいる。そして、男子は乱暴だとか、基礎が出来ていないから教え難いという理由で、男子クラスを担当したがらない「ベテラン」といわれる教師がいて、新任や若手教師にまかせてしまっている学校がある。

もう少し学習主体である子どもたちについて丁寧に調べ、彼らに適する教材を開発したらどうだろう。先に述べたように家庭の教育力の衰退から、子どもたちの身辺処理の訓練は小学校時代で中断され、部分的にも全体的にも生活を営む能力は著しく低い。しかし、よく観察すると技能習得の学習自体を嫌っているわけではない。家庭科の共修は、「技能主義でない技能の教育」について見直す機会である。同じく家庭科の実用主義を批判した「今役立つ教育は、将来役立たない。だから原理や原則についての学習を」というスローガンも少し修正して、「学習したその日に役立つ、青年期に一人立ちする時も、働き盛りの時の自己管理にも、高齢期を迎えても役立つ学習を」、に変更して教材開発していったらどうだろう。共修は、教師の力量と教材の質を

点検し、それらを高める活動とともに開始されなければならない。

四、教員養成の課題

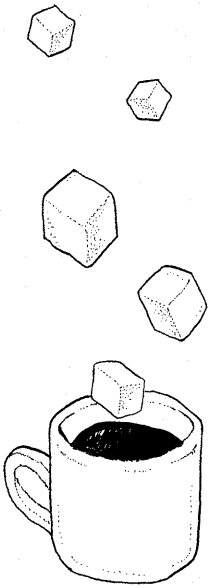
教員養成のための教科専門科目である「家庭科教育研究」の最初の授業で、学生に家庭科観を尋ねてみると「家庭科＝主婦準備教育」観が主流を占める。それを通して彼らが受けた過去の家庭科の状況が彷彿される。まずは家庭科教師自身が「女への女による女のための家庭科」観から自由になる必要がある。また、中学校や高等学校で共学に難色を示しているのが受験科目を担当する教師や、新たな施設設備を整えなければならなくなった経営者である場合が多いことを考えると、家庭科の担当者は家庭科が、理科や社会と同様に普通教科の一つであることを外部に積極的に理解させる努力をしなければならない。

そのためには現場教師の意識の切り替えを言うだけでなく、教員養成における課題があることがわかる。小、中、高校の家庭科の現場でさまざまな教育実践が試みられるように、教員養成の現場でも教育内容の検討や教材・教具の開発の努力が行われている。ここでは私のささやかな実践を紹介しよう。

教材研究は、大学生自身が生活者であることを自覚する作業から開始する。漫然と見ていては気づかないような生活の仕組みを、やや非日常的な作業を通して極端な形で暴いてみる。そして関心をもった生活事象から一つの課題を設定し教材化を試みる。教育内容を整理する段階で小、中、高校の教科書や参考書に目を通し、対象学年を特定しながら目標を定め、学習方法を工夫する。これらの作業は学生四～七人による班活動で行い、授業のなかで逐次発表する。①から⑤までは一クラス四〇名から六〇名の、二〇歳前後の教員志望の青年たちと作った授業の一部である。（　）内は対象学年と作成班の学生数である。

①買い物の計画の必要性――「五人分のカレーライスを作ろう」

献立表を持たず、店内で思いつくままに材料を購入する場合と、買い物計画表を作って行った場合、どのような違いがあるのだろうか。それを調べるために近くのスーパーマーケットで実際に買い物をし、所要時間と動線と費用の三つの項目で測定し数字を比べた。買い物係は他班の学生に頼んでいる。発表は教室の中に店内の売り場を模造紙で再現し、



買い物行動を役割演技した。計画していない場合のウロウロ姿と、結果としての三つの「無駄」が誇張されて演じられると、学生たちは笑いながら頷いて見ていた。動線の違いは二色の紙テープの長さで示された（小学六年用：女子二名、男子三名）。

②現代の食事には柔らかい物が増えたが、歯の健康を考えて再検討する必要があることを知らせる――「君は頼朝の食事が食べられるか」

卑弥呼の時代と現代の平均食事時間、及び食べ物を噛んだ回数の平均値を比べると、五十一分・三九九〇回数と十一分・六二〇回数（神奈川歯科大資料）になる、という資料の面白さに触発されて、近所の歯科医から最近の歯をめぐる状況について取材し、教材を作成した。発表はまず文献に基づいて源頼朝の食事を再現し、班員で食べ、食事時間や噛む回数を調べ、それを学内食堂の定食の場合と比較し表にまとめた。そして現代の食材料や調理法につい

て注意を喚起した（小学五年用：女子七名）。

③廃棄を考えた購入――「この机、三年後のゴミ？」

下宿先の自分の部屋にある全ての備品や持ち物に「〇〇年後のゴミ」の札を貼る。菓子袋の「十秒後のゴミ」から、自分自身に貼った「六十二年後のゴミ」まで部屋中「ゴミ」の札だらけ。地球環境を考えると、廃棄は自分個人だけの問題ではないとすれば、購入時も慎重にならざるを得ないこととか、使用目的が終了するまえに、無造作に廃棄していたことに気づき、その理由を考え教材化した。発表は作成した紙芝居で行った（中学一年用：女子三名）。

④ゲーム作りを通して自分のライフコースを考える。――「人生すごろくを作って遊ぼう」

教育実習で中学生に将来の生活設計を書かせたところ、結婚までは予想していろいろ記入するものの、その後が続かず、参考書のライフサイクル例を丸写しし、その他に何も書くことがなく困っている子どもたちを見て学生はショックを受けたという。自分が未だ経験していない年代の暮らしについて興味関心が深まるように、しかも押しつけでなく子どもが自分から調べてみたくなるように仕向けるため、遊ぶことよりも調べて作ることに重点を置いた教材作りをした。中学卒業以降の年代を四つに区切り、模造紙の上に引かれたコースのそれぞれの区切りごとに喜びの札、悲しみの札、節目（分岐点）の札を必ず一枚以上貼ることにする。札の内容は新聞や雑誌の人生相談欄や家族からの取材で考える。彩色イラストで美しく仕上げた。発表はルールを示してゲームをさせた（中学三年用：女子三名）。

なお、中学生にこのすごろくで実際に遊んでもらった結果、「男子が作った人生すごろくで女子が遊ぶ」「女子が作った人生すごろくで男子が遊ぶ」と面白いだろう、という意見が出た。男女相互理解

の手だてとしても面白そうなので検討中である。

⑤妊婦と住居――「階段下りるのが怖い――お腹の大きいお母さん」

別の班が幼稚園から中学校、図書館から美術館、レストランや下宿などいろいろな所の階段を調べてきて発表したことに触発されて、妊婦になって階段の昇り降りを模擬体験することにした。約四キログラムの砂入り人形を作り、デニム地でつくったエプロンのポケットの中に一キログラムの砂糖袋三個とともに入れてしっかり縛り、キャンパスの中を散歩した。階段のこと以外に、和式トイレの不便さ、廊下が狭くロッカーの置き方が悪い、階段の数が多く急だとか休憩する場所が欲しい。また一般学生の歩き方が乱暴だといった報告も付け加えてあった。発表は体験に基づく感想が中心だったが、ハンディキャップ者と住まいについての問題意義を膨らませていた（小学六年用：男子二名、女子四名）。

なおこの教材はこの後、さらに検討が加えられて題材名「十三年前のお母さんになって」となり、附属中学一年の家庭生活領域で授業にかけられた。

おわりに

家庭科は自分自身が生活者であるとの自覚をもち、生活事象や構造を分析する方法を習得し、教材化する能力と指導法を工夫する技能をもっている教師が担当するのであって、それは女性に限らない。また、家庭科の対象は、近隣からアジアの地域、全世界の人々や自然と共存・共生しながら、自分自身と家族が健康で快適な生活を実現するための知識や方法を学ぶのであって、それも女性に限らない。家庭科の共修が肩肘張らずに語られるような教材つくりと授業つくりに精を出そう。

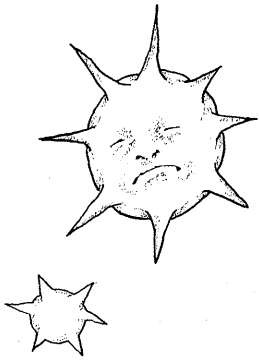
（福岡教育大学）

＊　このシリーズは、今回で終了いたします。

特集〈こだわる〉

こだわりと情緒

藤原　正彦



数学者には、こだわる人が多いですね。数学の世界は知恵比べのようなもので、わからない問題を誰が一番に解けるかと、世界中の数学者が考えています。何年もかけて、寝ても覚めても、風呂の中でも、電車の中でも、歩きながらでも、どこでも考え続ける。そうしないと解けないのです。ずーっとこだわり続ける。食卓についても、何を食べているのか解らなくなる程こだわって、最後は、頭脳ではなく、もうほとんど念力で解くようなものです。独創は、こだわらないことには生まれてこない。異常なこだわりです。最近の学

生は、こだわりがなくなってきている。これは憂慮すべき事と思います。

こだわるには、こだわるだけの動機が必要で、例えば、数学の研究というのは、山の頂きにある、美しい花をとりに行くようなものなのです。その花をとろうと必死でこだわる訳です。動機として、まず、その花の美しさに感動しなくてはいけない。感動すればする程、力が出てきて、千尋の谷に行手を阻まれても、熊が出て逃げ帰っても、無限の樹海に踏み込んでも、つまり、何度挫折に会っても挑戦し続ける事ができる。感動する心――情緒――に支えられて挑めるのです。研究は、失敗するのが当たり前、それでも、こだわり続ける事ができるのは、知識や、頭の良さではなく、情緒、例えば、美しいものに感動する力が強いかどうか、というようなことです。数学は頭の良さだと思われていますが違います。IQ200を越えている人でも数学者になれるとは限らないが、IQ138で天才数学者もいる。この天才数学者は、ある夜、勉強していたら美しい数学の定理を見て、感動して涙を流すというような、感動力の持ち主です。

情緒をどのように育てるか、これはとても大きな問題で難しい事ですね。今の世界中の教育論の誤りは「良い事の積み重ねは良い事」という事でしょう。卑近な例ですが、三歳で、ピアノを習う事、音に慣れるし絶対音感もつくし、これは良い事です。三歳でヴァイオリン、これも良い事。三歳で水泳、これも、泳ぎを覚えるには良い事。三歳で英語、これも良い発音になるし良い事です。しかし、全部やってしまうと、子どもは将来、伸びな

くなる。情緒力が育つ時がないからです。やっぱり、野山を走り回ったり、泥遊びをしたり、友達と殴り合いをしたり、兄弟で、おやつの取り合いをする事が必要なのですね。知識を教える事も良い事です。知識はないよりもある方が良い。でも、そればかりだとだめになります。だから教育は難しいですね。

情緒を育てる、こだわりの力を育てる事は知識とは無関係です。しかし、「教育」の果たす役割は大きいと思います。例えば、夕方、子どもと一緒に買い物に行って、美しい夕焼けを見た時、母親が立ち止まって、「ああ、美しい夕焼けだ」と感動する。又は、美しい音楽を聴いて感動する親の姿を見て、子どもも、「ああ美しい」と感じるようになるのではないでしょうか。こだわりにしても、一生懸命何かをする、又は考え続ける事を褒め、励ましてやる必要がある。僕が小学三年生の時、父は「一から十まで足したらいくつになるか」と、僕に問題を出しました。普通に順番に足していく方法では、父は褒めてくれないのを知っていたので、違う方法で、とこだわって考えたものです。そしてできたら、すごく褒めてもらいました。

今、日本に、こだわって考える人、考え続ける人が本当にいなくなった。政治や、経済でも、独創的なアイデアは、個人が汗水たらして考え続け、こだわりによって生まれるものです。ディスカッションは修正する場です。国際貢献でも、貿易黒字でも、誰かが骨身を削るようなこだわりで考えれば、良い考えが出るのに、誰もしないですね。

こだわりの方向が大切ですね。例えば、乞食が、おなかがすいて、死にそうになり、パンを盗んだ。それをみていたAは、「日本は法治国家である。彼の窃盗行為は法律を犯しているので、警察へ通報しよう」、Bは、「彼はパンを盗まないと死んでいた。人間の命は一片の法律よりも重い。だから見て見ぬふりをしよう」と考えた。AかBか？　出発点でどちらを選ぶかで方向は全く違う。この判断の元になるのが情緒力なのです。情緒力が育っていないと、こだわる方向がままならなくなります。何も見えない暗い海にのり出した船に喩えると、情緒は、船頭の方向感覚です。論理的思考力は、船頭の腕力。知識は、しっかりとした船体です。情緒、論理的思考力、知識、どれが欠けても、船は進まないのです。今の日本では、知識は過剰な程、論理的思考力は、それ程でもないが、まあまあるでしょう。そしてこの二つは、誰もが強調している。が、しかし、方向を決めるべき情緒の大切さが言われていない。だから、「こだわると怖い」という迷信が生まれるのでしょう。変にこだわるとヒットラーになってしまいますからね。彼は非常に頭のいい人でしたから、ユダヤ人は虐殺すべきというこだわりの論理の筋は通っていたけれども、情緒がおかしいから方向がおかしくなっていったのです。こだわりと、こだわりの方向を決める情緒を一対にして、きっちり育てる事が重要です。なつかしさ、不幸な人に対する敏感さ、美しいものに感動する力、勇気、愛国心、正義感…など、高度な情緒を育てておかなくてはなりません。夕焼けや林の間から見上げる青空の美しさを共に感じたり、障害を持った子を手助けする大人の姿を示したり、情緒を育む努力をするのです。自然には出て

こない、教育しないと育まれないものだと思うのです。

母親の視野は、三年先位までです。大切なのは、大学を終え、世の中に出てからのびる人間をつくる事です。世の中には、論理的に正しい事はたくさんあり、その中からどれを選ぶかを試されるのです。職場で、重要な判断の岐路に立った時、それは、その人の人間性、情緒力が試されているのです。学問の世界に進んでも、この情緒力は一番重要です。与えられた問題ができても、新しい問題を作ったり、見つけられないとだめです。独創力、判断力、人間としてのスケール、すべて情緒力で決まります。

どういう家庭に育ったか。どういう先生に出会ったか。どういう読書をしたか。どういう恋愛をし、どういう失恋をしたか。どのような悲しい別れをしたのか……すべてがその人の情緒となって、判断力になるのです。そして、こだわりの方向を決める、出発点の選択に、影響するのです。世の中に早熟な天才の例はいくらでもあるが、大成した話はそれほどきかない。僕は当たり前だと思う。情緒を育てる子ども時代を飛び越しているのだから。

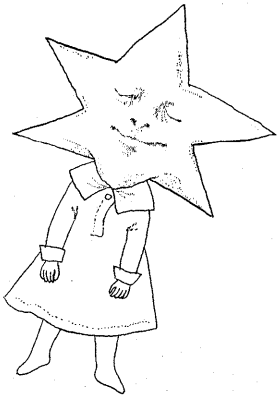
脳生理学で、論理、知識の部分は傷ついていないのに、感情の部分のみが傷ついている患者は判断ができないそうです。医学的には証明されかけています。

これからの、独創的な考えを持ち、判断のできる人間を育てるには、情緒力が必要と思います。こだわりが大切で、その方向性を決めるのが情緒です。（談）

（お茶の水女子大学数学科）

小さなものへの視線

森下　みさ子



どうも私は、人が気にとめないような小さな部分にこだわるところがあるらしい。「こだわる」という熱っぽいテーマにもかかわらず、私の場合は、こんな頼りない言い方から始めるしかない。というのも、いつ何時、「こだわり」にひっかかってしまうか、本人にもわからないからである。それどころか、ひっかかったという自覚さえ持てないでいる。せっかくのテーマなのだから、「私は○○にこだわっています」とか「私は○○についてはウルサイ」とか主張できたらどんなにかっこいいだろうと思うのだが、私にはこの○○にあたるものが実はない。ないというより、出会うまで、ヘタをすると出会ってもわからないまま、我れ知らず引きずり込まれているのである。

「こだわる」のは、私の場合、研究資料の領域でのことである。資料を読んでいて、説明のために付け加えられたような絵や図に、ふとした拍子に目がとまり気になりはじめると、もうイケナイ。いつのまにか脇役の絵や図の方が前面に広がっている。「ふと」を誘い出すのはヴィジュアルなものが多い。網膜を通ってダイレクトに感覚に刺さってくるからだろうか。「どうしてこんな風に描かれたんだろう?」「なんでこの時代にこんなものがあるの?」と、考え始めたらきりがない。本題そっちのけで、絵をつぶさに眺めてはあれこれ想像をめぐらし、あげくのはてに単なる思い込みのあてずっぽうで気になる周辺をウロウロと調べ始めたりする。調べてみると不思議なもので、無関係に分類され配列されていた研究や資料が、私の中では勝手にうごめいて連なり結ばれて、細い地下茎を張り巡らしはじめる。いきどまりのことも多いけれど、うまいぐあいに地下茎をたどって、それまでは見えなかった歴史の地層が見えてくることもある。そこに埋もれていた女性や子どもの声が、連なって聞こえてくることもある。

ただし、これはまさしく「落ちこぼれ」のなせる技なのだ。枝葉末節にひっかかってしまうと、本題からそれるのは必至。全体の輪郭、要約、テーマ、ポイント、まっとうな理解の核心からはずれてしまう。だから表面的に見れば、これは「理解の遅れ」ととられてもしかたない。当面の課題である全体の理解よりも、オマケのような部分にこだわっているのだから……。けれど、いいわけがてら、もう少しこのずれ方を見つめ「理解の遅れの本質」をとらえなおしてみよう。ここでずれるのは、おそらく視線の焦点だろう。「木を

見て森を忘れる」と狭視的な視線は批判されがちだが、ささいな部分がふと気にかかった瞬間に森は遠のき、一本の木が、その木肌が、さらには木肌の奥の、地下へとつながる樹液の管が視線を支配していく。私の名前には「森」がついているのに、さらに「下」がくっついているのがいけないのだろう。どうしても森を鳥瞰する視線が持てずに、一本の木をつたって見えない地下へと、視線はミクロの旅にいざなわれていくらしい。この視線の当て方は、小さい子どもと似通ったところがあるのではないだろうか。『枕草子』の「うつくしきもの」の段をあげるまでもなく、小さい子どもは大人の目には入らないようなチリやアクタを、オモチャのようにつまみあげて弄ぶ。足元のブロック塀の穴から向こうを覗いてみたりする。広告のすみっこの絵を見逃さない。子どもの視線の低さと細かさは、全体を見下ろす大人の視線とは違う世界へと通じている。その場にいって、近付いてみて、飽くことなくこだわってみてはじめて見えてくる世界が、日常の視線の裏側にあるのかもしれない。表面的な理解の遅れは、小人のような細かい視線と歩幅を駆使することで、表面には現れにくい世界の本質へと通じているのかもしれない。

ここまで「ささいなこだわり」を自己弁護してきて、気づいたことがある。それは、ここに至るまで私の「こだわり」はいい形でほおっておかれた、ということである。研究の常套手段や形式やらをがんじがらめに教え込まれていたら、私のような臆病な怠け者は、遅れたくないために表面的な理解をこしらえてしまうか、適当な知識をあさって形だけ整

えてしまうか、きっとそんな器用なこともできないから、さっさとこの世界から足を洗っていただろう。めんどうな「こだわり」に足をつっこんで、小人の目と足をもって、地下のミクロの旅をすることなどなかっただろう。適当な距離から面白がって見ていてもらえたから、小人はいい気になって「こだわり」を歩いてこれたのではないか。そう考えると、教育されなかったわけではないけれど、それ以上に、私はいい形で「保育」されたのではないかと思う。「保育」の原義も知らないままいうのは不遜だけれど、その子が今持っているものを保ちながら、そこから育っていくのを助けるのが「保育」であるとすると、私はいい年をしていい保育を受けたような気がする。そのおかげで、自分の視線や感覚を保ちつつ育んでいくような「こだわり」を、どこかでひっそりと楽しんでいられるのだ。

（聖学院大学講師）

こだわりにこだわる

田中　三保子

日常の保育の中での子どもの「こだわり」について考えてみると、二つの側面があるように思う。それぞれについて実例をあげて考察してみたい。

〈事例1〉

A夫が珍しく私のところにやってきた。「手に爪のついたのが作りたい」という。具体的な形がわからないので、あれこれ聞きながら作ってみる。手甲（てっこう）に三本の長い爪がついたようなものらしい。人の爪のように丸みを帯びていて、なおかつ先端が内側に曲がっているのがいいのだという。ボール紙を湾曲させて微妙な曲線を作るのにちょっと手間どる。紙の目に逆らう方向はきれいに曲げにくいからだ。私が試みる間、A夫は額に縦じわを寄せてじっと手元を見ている。爪の曲がり具合いが気になるらしい。それらしいものが一つできると、顔がぱっと輝いた。そして「もう一つ作っておいてね」と念を押して、安心したように遊びに行った。その後で男の子が二人、A夫と同じものが欲しいといってきて、今度は私が曲がり具合いにこだわって作ったのだが、彼らはそんなことよりも、少しでも早くできることの方にこだわっているようであった。

A夫は爪の微妙な曲がり加減にこだわった。彼がもう少し年少であったなら、その後で同じものを欲しがった子ども達のように、「似たようなもの」で満足してくれたかもしれない。A夫にははっきりしたイメージがあって、細かいところまで見分けているからこそこだわったのだ。細部にこだわるということは、それを弁別する力が育っていることを示しているといえよう。子どものこだわりをきちんと受けとめ、その意味するところを理解

してイメージが実現できるように対応していくことは、子どもの気持ちに添うというだけでなく、持てる力を伸ばすという意味でもきわめて大切なことだと思う。やりたいという意欲をもっているその時に、やりたいことがうまく実現できれば、子どもは達成感、満足感を味わい、また新しいことに挑戦しようという気持ちになる。そしてまた、新たな遊びに意欲的に取りくんでいくうちに、自分の力を伸ばしていくのだと思う。保育者としては、子どものこだわりに気づく感性をもち、ひとつひとつを大事に考えて誠実に応えていくことが必要なのではあるまいか。

〈事例2〉

B夫は三歳で入園してきた。泣いて母親にしがみつき、なかなか慣れなかった。登園したときすぐに抱きとるようにすれば泣きやむようになったが、今度はエプロンをいやがりだした。母親は毎朝入口でなんとかつけさせようとするのだけれど、激しく抵抗する。朝の手洗いとうがいもやろうとしない。

私には、B夫が幼稚園という新しい集団の一員になることを拒否しているように感じられた。母親の実家でのたくさんの大人に囲まれた暮らしから、ある日突然、自分の意思とは無関係に、二〇人の子どもに大人が一人という生活に放り込まれて、こんなところには入りたくないと彼なりに抵抗しているのであろう。それをエプロンやうがいにこだわると

いう形で表現しているのだと思われた。

男の子のなかには今までつけたことのないエプロンをいやがる子がときどきいる。けれども幼稚園の生活が近しいもの、好ましいものになってくると、こだわりがとれて特別なことと感じなくなるようである。私はB夫に一方的に集団の規範を押しつけたくないと思った。B夫がいつか自分から受け入れてくれるのを待ちたかった。エプロンは母親から受け取ってコートかけにかけておき、帰りに一応促してみることにした。B夫はアトピーがあって手の皮がところどころむけている。それもあって手を洗いたくないのだろうと思い、手洗いは彼の手をとってそっと水をかける程度にし、うがいをいやがれば、コップはさりげなく元に戻すことを繰り返した。

そのうちに、こんどはいつの間にか靴と靴下を脱ぎ捨てるようになった。だんだん暑くなってきたし家では裸足であろうから、その方が気持ちがよいとは思う。帰り際に履かせようとしてもいやがっていたのだが、ひと月ほどすると、靴下と靴は履いてくれるようになった。六月半ばのある朝、登園してきたときに母親に言われた。「今朝はエプロンをしていることに気がついていません」。その日から不思議にB夫はエプロンに全くこだわらなくなった。うがいも、一学期末には私がコップを手渡せばするようになった。

初めから何のこだわりももたなければ、B夫は幼稚園生活をもっと楽しめたのに違いない。それでもこだわらざるをえなかったのであろう。私としては、B夫がこだわっている

ことを事実としてそのままに受けとめ、彼のこだわりにつきあっていこうと思っていた。彼は、なじんではこだわりを捨て、こだわりを捨てることでまたなじむことを繰り返して、少しずつ新しい集団に溶けこんでいったのだと思う。

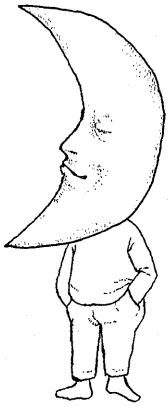
保育の中では、毎日たくさんの子どものこだわりに出会う。1のような事例の場合には、とっさにはどう応じたらよいのかわからず困惑してしまうことも多い。子どものイメージしているものを知らなかったり、知っていてもそのままでは実現が難しい場合もある。限られた状況や材料の中で、子どもの技量に合わせて実現するにはどうしたらよいかを、子どもと一緒に探りながら工夫してみることになる。そしてうまくいって、子どもが喜びを表現してくれたとき、私自身も達成感、充実感を味わうことができるのである。

事例2のようなこだわりは、子どもの内面に深くかかわっている。原因や理由はよくわからないことが多く、簡単にどうにかなるものでもない。その子がこだわらざるをえない気持ちを受けとめて、できれば穏やかに過ごせるような方策を探りつつも、心の揺れはそのままに根気よくつき合っていく。そうしていつか、その子がこだわらなくなっていることに気づいたとき、保育者としての大きな喜びを味わうことができる。

（お茶の水女子大学附属幼稚園）

『平家物語』にみえる一つの話をめぐって

山添　昌子



平安時代の末におきた源平の兵乱（ひょうらん）・興亡（こうぼう）をおもな素材にしている『平家物語』が、何時、誰により、どのような場で編まれたのかは、今日でもまだほとんど判っていない。私は大勢の人々が登場し、やがてはみんな死んでいってしまうこの物語が、どうして今の姿になったのであろうかということを究めたいと、長い間こだわり続けている。『平家物語』が作られた背景の一端を、「乳母（めのと）のふところ」に顔を入れる幼い子の話を通して考えてみたい。

（『屋代本平家物語』角川書店と新潮日本古典集成『平家物語』の本文を用いる）

『平家物語』も終わりに近づく。平家の一門は長門国壇の浦で敗滅した。生けどられて関東の源頼朝のもとへ送られることになった平宗盛（平清盛の子息・平家一門の棟梁）は、引き離されていた子息と四十余日ぶりに最後の対面をしている。敗北の将である宗盛の悲さんな状況を傍らに置きやれば、それは今日でも平凡な温かみのある家庭で見られるような、親子の再会と別れの光景である。子は父の温かい膝と手と胸の中でそれはうれしげであり、別れる時になるといやがってとりすがって泣くのである。無心な幼い子の姿が読む者には悲しく映るが、父の大きな温かい胸の中にいると思っている子はこの時幸せなのである。

その翌日、呼び出された子はふたたび父に会えるかと喜んで出かけて行く。だが、着いた所は河原の敷皮の上であった。父を探す子に、太刀を持って寄る武士。無邪気な子は殺されるなどとは夢にも思わず、泣きやむようにとおどすのかと思い、泣くまいと我慢して「乳母のふところ」へ顔を入れているのである。父、母のふところ代わりともいえる「乳母のふところ」へ入り込む幼な子の様を読んで、私は乱世に生きる敗将の息子でなければ、と運命の悲劇に思いをいたすのであった。この無邪気で無心な子は、物語の上ではこの時に殺されてしまう。もし魂というものがあるならば、思いもかけないこの無残な事態をこの幼い子は何と感じるであろうか。あの世での子の心を思うと悲しいまでに恐ろしい。

『平家物語』にみえる宗盛の子息についての話は、「乳母のふところ」にこと寄せて、大事に育てられた幼児が人と時代のはざまに落ち入り、思いもかけない悪意をあびて、命を失ってしまうことの恐ろしさ、無残さを私達に訴えているのである。ではこの恐怖感は、源平の兵乱以後何時、どこの場で最も強く感じられていたのであろうか。

ある日、『法隆寺別当次第』の記述が私の目をひいた。それによると、平家一門が滅亡して五十年近くの歳月が過ぎた天福二年（一二三四）頃より、南都の法隆寺で摂関家の一つである九条家が聖徳太子御影や太子曼陀羅などの画像を描かせて、供養につとめている。そして、保元から承久までの乱世の天皇達にまつわる死霊や佐渡に流されている順徳院の生霊などを鎮めようとしている。この時期、九条道家のむすめが産んだ幼い四条天皇が位についているのだが、天皇の母は次の子の出産に際して子とともに死去してしまっている。九条家出身のむすめからの皇嗣誕生は当分なくなった中で、道家は、幼い孫の四条天皇が無事に成長することを必死に祈り、大がかりな鎮魂の供養を行っていたのであろう。

九条道家は、無心な孫の四条天皇の姿を見るにつけ、無邪気な童子であった平家一門の棟梁の子息が無残に殺されてしまったことに深い恐れを抱いたものであろう。この子の死霊も孫の天皇にとりつかないようにと、魂鎮めを行っていたにちがいない。宗盛の子につ

いての話と九条道家による祈念・鎮魂とを直接むすびつける資料は今のところ何も見つかっていないが、私は何らかの関わりがあるのではないかと推測している。さらに付け加えると、物語文学の最高峰といわれる『源氏物語』の背後に摂関流の藤原道長が存在しているように、『平家物語』がほぼ今の姿になった背後には、同じく摂関流につながる九条道家が存在していたのではなかろうか、という気さえするのである。

『平家物語』には数多くの話が含まれているが、出来るところから一つずつその背景を明らかにし、あわせて物語全体の背景を知りたいとこだわりつつ、三十余年が過ぎてしまった。まだまだ道は遠く、残された時間は少なくなっていくが、これからも『平家物語』成立の解明に力を傾けたい。

（女子聖学院短大非常勤講師）

子どものこだわりと保育

大橋　利恵子

けい君は三歳児、入園式の日はお母さんと一緒だったので何事もなく過ごせました。し

かし二日目の朝、けい君はお母さんから離れようとしません。三歳の最初は無理に離そうとせず、お母さんにゆっくりつきあってもらい、だんだんに園生活に慣れてから、お母さんとバイバイできるようにしています。

けい君もどうやらお母さんとバイバイとできるようにはなったのですが、廊下から上目使いで担任の先生の顔をじっとにらんで動きません。

「けい君、おはよう、出席ノートにシールを貼って遊びに行こう」

と担任が誘うと、ゆっくり近付いてきます。

「かばんおろして」と言うと、首を振ります。

「あれ、とるのいやなの。それじゃ、そのままでいいからシールだけ貼ろうか」

ということで、とりあえず出席ノートにシールを貼って園庭に遊びにいきました。砂場に行って穴を堀り始めたのですが、けい君はかばんを肩にかけたままです。

「けい君、かばんここに置いておこうか」

と声をかけると、けい君は必死な顔をしてかばんを押さえています。その様子を見て、担任はいそいで、

「いいよ、そのままかばん持っていてね」

と付け加えました。

それからしばらく、けい君のかばんはおろされることなく、どこで遊ぶ時もけい君の首

にぶらさがっていました。かばんをかけていることにこだわっている、というより、かばんをかけていることで、自分の気持ちの安定をはかっているようでした。

その姿を見て、子どもが時々見せる（あれじゃなくてはだめ）とか、（こういう手順でやらなくてはだめ）というこだわりは、そのことで一番安心できる状態を確保しているのではないか、と感じられました。もしそうだとしたら、教師は教師の考えで、かばんをかたづけなくては遊びにいけないとか、これはここに置いておかなくてはいけないとか言っていたら、子どもの気持ちとかけ離れてしまっているということになります。子どもがこだわっている事柄の善し悪しを考えるより、こだわっている気持ちになってあげられる保育をしたいなと思います。

さて、けい君のかばんはどうなったかといいますと、しばらくたつとかばんが邪魔になってきたようで、遊んでいるところの隣に置かれるようになりました。さらに六月ごろになると、かばんはロッカーに納まるようになったのです。しかし、さらにけい君の真のこだわりが発見されました。ある日、砂場で遊んで汚れたので、シャツを着替えさせようとするとどうしても脱いでくれません。今着ているウルトラマンの絵が付いているのでなくてはいやだと言い張ります。けい君がウルトラマンが好きだということは知ってはいたのですが、ここまでとは……と驚くやら感心するやらでした。私達が「こだわっているかばん」と思っていたのは、実は「かばんに付いているウルトラマンの絵」だったのです。

けい君のこだわりがウルトラマンと判明した後は、それを利用して一緒に遊びやすくなったことは勿論です。子どものこだわりは興味の強さかもしれません。その事柄ひとつをめぐって、いろいろな遊びを考えられるのもすてきです。また、このように一人のこだわりが保育の中でうまく生かされていくことは大切だと思います。

しかし、遊びの中ではどうしてもこだわっているとトラブルの原因になることもあります。たかし君はにこにこしながら、いたずらをしかけてきたり、五歳の子に一緒に遊ぼうかと気軽に声をかけたりできる活発な三歳の男子です。心の中に楽しいイメージをいっぱい持っているようで、会話も弾みます。例えば、給食の時（岐阜は幼稚園でも給食です）どこからかはえが飛んできて、食器のまわりをうるさく飛び回ります。

「はえがうるさくていやね」と、私がつぶやくと、

「へんなおじさんのはえだね」とたかし君。

「え、へんなおじさんのはえ?」と聞き直すと、

「そう、へんなおじさんのはえ」

それ以来、三歳児のクラスではえを呼ぶ時に「へんなおじさん」とか「いやなおじさん」などの呼び名がついてしまい、（おじさんと呼ばれる方たちには申し訳ないのですが）はえがくると「へんなおじさんが来た」と騒ぐようになってしまいました。

そんなたかし君の大好きな遊びはダムごっこです。五歳児たちがしている時にも、いつ

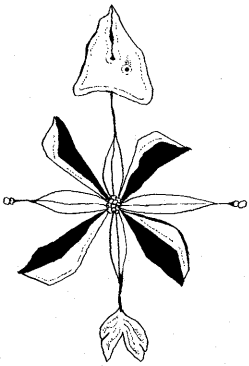
のまにか仲間になってせっせと水を流しています。その日は三歳と四歳が一緒に川を作り、穴を掘って、水道からホースで水をいれ、川から穴へ水を流して遊んでいました。ふとしたきっかけでホースの先に砂がかかり、水の出口がふさがれて見えなくなり、しばらくすると砂が流され、再び水が流れて出てきました。それを見たたかし君は、自分の遊びたいイメージにぴったり合ったようで、すごくそのことが気に入り、何回も何回もホースの先に砂を盛り、その砂がくずれていくことを楽しみました。しばらくは、みんなそれでよかったのですが、四歳の子がホースの位置を変えて遊びを変えようとした時、たかし君はすごいいきおいで、「ダメ、ホースはここでなくてはだめ」と、ホースを奪い返しました。誰がどう言おうとホースの位置を変えさせないたかし君と「四歳に威張る気か」という気分の四歳児がけんかになったのは、すぐのことでした。

たかし君のこだわりを通させてあげたい、でも遊びの場面ではそうもいかない。自分のこだわりを思い切り出す良い気分や、周囲にそれが受け入れられないくやしさ等の経験が、子どもの育ちに繋がっていると思いながら、たかし君のこだわりを見ている私でした。

（岐阜市立大洞幼稚園）

こだわらないことへのこだわり

中村　憲治



こだわりには、知らず知らずの内に持っているものと、自ら意識的に持っているものとがあると思いますが、私はかつてその両方を持ち、そしてそれにあるきっかけによってこだわらなくなったという経験があります。そのことをここでお話ししたいと思います。

二十歳頃の私は、かなり極端な固定観念を持ち、それを疑うことすらしませんでした。私の父も祖父も東大出のエリートでした。母方は学者の家系で、母も津田の英文科を出ていました。絵に描いたようなエリート家庭に育った私は、知らず知らずの内にエリート意

識だけを身に付けていたのです。しかしながら生来腕白だった私は、高校の時、体力を持て余すとろくなことはないと思ったらしい父の勧めもあって、野球部に入り、三年間野球漬けの生活を送ったのですが、気が付いてみると勉強の方は気が遠くなる位遅れていました。そして当然の如く浪人をしました。そんな時父が「そろそろこんな本も読んでみろ」と言って、私の机の上に井出隆の『哲学以前』を置いていったのです。エリート意識に体育会系単純思考がプラスされていた私にとって、その本は大変な衝撃でした。はっきりとした内容はもう覚えていませんが、絶対といえるものなどない、ということ、そしてまず信じているものを疑うところから始めろ、というようなことが論理的に非常に説得力のある言葉で書かれていたように思います。読み終わった時、私の内部でそれまでの一切のものが、ガラガラと崩壊していくのが分かりました。そして精神空間の無限の広がりを感じました。その時の戸惑いと感動は、今でも忘れることができません。それからの私は、むさぼる様に色々な本を読みました。そして自ら思考することの苦しさと嬉しさを噛みしめ始めたのです。心の底から『哲学以前』に感謝しました。その思いは、今も変わりません。

もう一つ、今度は意識的に持っていたこだわりにこだわらなくなったお話をします。

私は、子どもの頃から生き物が好きでした。犬や猫はいつも飼っていましたし、その他

にも金魚や鯉、小鳥や虫や蛇まで飼ったことがありました。犬や猫は友達みたいなものでしたが、眺めていて飽きないのは、池の金魚や鯉でした。一尾〈〈顔も違うし、個性も違うのです。そして春、池に棕櫚を入れておいてやると、卵を産みつけます。それを別の水槽で孵すと、無数に稚魚が孵ります。でも成長するのはせいぜい五、六尾でした。ある程度大きくなったら池に入れてやる。猛烈な生存競争を生き残った彼らは、池でも順調に育ち、二、三年で親達と同じ位の大きさになります。大袈裟に言えば、そこに生命のドラマを見るような気がしていました。そんな私でしたから、当時は釣りが大嫌いでした。平和に泳いでいる魚を騙して針にひっかけるなんて、まっとうな人間のすることじゃない、と思っていました。まして他に食べる物がいくらでもあるのに、釣った魚を食べてしまうなんて、文明人のすることじゃない、とまで思っていたのです。

ところが私が大学院の院生だった頃、父が鬼怒川のほとりに別荘を建てたことがそのこだわりを捨てるきっかけになったのです。私には釣り好きの友人がいました。彼がこの別荘建築を、我が事のように喜んだのです。勿論彼は釣りをする気なのです。そして私に釣り竿までプレゼントしてくれたのです。こうなると一度位はいやでも彼の釣りに付き合わないわけにはいきません。そしてその日、まだ夜が明けぬ内から彼は喜々として私の仕掛けまで作ってくれました。そして歩いて二、三分の川まで行きました。やっと浮きが見える位の明るさです。場所を決め、彼がエサを付けてくれた仕掛けを投じました。二、三投

目に浮きがピクピクと動いた後沈みました。軽く合わせをくれる、すると手に魚の動きが伝わってくる、そして取り込む、手の中に可憐な雄のオイカワが踊っていました。そして三尾目が釣れた頃には、もう夢中になっていました。エサも自分で付けるようになっていました。そしてすっかり陽が登った朝の九時頃に、大きな感動と深い満足感につつまれて別荘に魚籠（びく）を下げて帰って来たのです。もうこだわりなどすっかり忘れていました。これは本能に根ざした喜びだ、この喜びにはとうてい逆らうことはできないと、この時私は思いました。それから彼と私は、暇さえあれば別荘に行って釣りをしました。釣った魚を食べたことは言うまでもありません。以前だったら考えられないことですが、自分で釣った魚を調理する楽しささえ、知ってしまったのです。その後私は、釣りバカの仲間入りをしました。色々な釣りをやっています。そして以前と変わらず生き物好きでもあります。でもその「好き」が、少し変わったようです。山で野兎等を見かけると、可愛いいな、と思う一方で、ごく自然に「おいしそうだな」と思うようにもなってしまったのです。

以上の経験から私の場合は、こだわらなくなることによって、新たな世界が劇的に開けてきたので、それ以降、三匹目、四匹目のどぜうを求めて、こだわらないことにこだわるようになった、というわけなのです。

（大学講師）

日々の保育の狭間で

矢萩　恭子

保育実践と保育研究の在り方との関係、〝書く〟という記述行為と〝書く〟主体との関係、意識作用と認識内容との関係、精神と身体との関係、言語化され言葉に掬い取られたものと言葉の網の目からこぼれ落ち言語化を免れた現象、事実として感得され得るものと真実と予感されるものとの差異、理解へと志向する主体と理解の妥当性、主―客の相克などなど、観念の迷路にはまり込んで身動きのとれない時期があった。保育者として生身の人間としての子どもと関わりつつ、その体験の中から動かし難い感覚として絶えず私の心に責めぎあっていたものたちが、出口を求めてもがいていた。

「保育」という現象を考える考え方を、考えて考えて考察の対象としていた自分。考えようとすればするほど、考える自分と考えようとする中身とのありようを、自分が考えることの中で拠り所としている思考の枠組みとの関係において、いちいち捉え直す作業をどこまでも緻密に行う必要があった。そしてそのときに出会った現象学的なものの捕まえ方は、知識の普遍妥当性とか、対象の実在的客観性といった事柄について近代の認識論や自然科学的思考の枠組みそのものを根底から問い直すことにおいて、研究主体である自分と端的に研究対象としては切り離すことのできない子どもとの関係性を問うことの意味を考えさせてくれた。

今こうして毎日を、まるごと現象の中に過ごす身となって、当時抱えていたような〝引っ掛かり〟が恐ろしいほど消え失せてしまった。大勢の子どもたちと時間に区切られた忙しさの中で体力勝負の生活を送っていると、一つひとつをゆっくりと反省し考察している余裕がない。余裕がないなどと言うのは自己欺瞞である、と謙虚に戒めているゆとりさえないような気がする。ああ、明日もあの子たちに会えるという喜びと期待で眠りにつける日が少しずつ増えてきているのがせめてもの救いである。精一杯の思いで子どもたちと共に一日を生きて、肉体の疲労を与えられた生活のささやかな充実感が慰めてくれ、そしてまた次の日があるという小さな小さな喜びが今の私を支えてくれている。

もちろん、以前に比べて子どもの思いを受け止め、他者を理解する力が増大した訳でも

なければ、自分という存在や出来事の意味についてケリがついた訳でもない。相変わらず、自分は「わからなさ」の中に佇んでいるただの無力な一人に過ぎない。

〝子ども〟という現象が客観的事実なのか、主観としての自分が編み出した意味や文脈に過ぎないのか。厳然としてある個の領野を越えて、他者と交わり、他者を理解しようと志向するためには自己と他者との越え難い断絶をどのように埋めていったらよいのか。偏見や憶測、誤っているかもしれない判断から逃れて、真に相手の存在に迫るにはどうしたらいいのか。そんな二元論的な問題設定はほとんど機能しなくなったような気がする。正直言ってそれどころではないのである。〝子どもと自分〟というシンプルな関係項は、大勢の子どもたちと自分、子どもと子ども、子どもと母親、母親と自分、子どもと現代の社会、保育者集団と保育現場といったようなさまざまな関係の連鎖の中ですごく複雑になってしまったような気がする。とは言うものの、子どもと自分との関係から出発して営まれる保育の実際において、その極めて個別な、一回性の、主観的体験をもとに「私」という個の枠から歩み出て、研究者としてであれ、実践者としてであれ、他者との対話を開く為には、私はどうしたらいいのだろうか。

かつて私はこのことについて保育者の記述行為ということを通じて考えようとした。保育者とすればとにかく子ども自身の主体的な活動を尊重し、それに寄り添いながら自分も存在することで、ひたすら子どもの求めていることや、子どもの抱いている感覚や気持ち

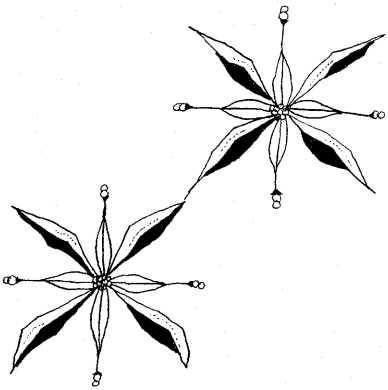
に近づこうと過ごす一日のことである。あらかじめ特別に決められた活動や時間割りのような区切りがある訳ではない。息づくように自然な一連の、ある意味ではのっぺりした時間の流れのなかで自分が経験したことをどのように言語化していったらよいのか、いつもとまどいを感じていた。自分にとってさえ多義に満ちた体験を、特定の言葉に固定し、特定の視点から生きることに対して逡巡していた。また、文字として表そうとする場合、既に自分が自明のものとして感じ取っている世界を、言葉として自分の内部から切り離そうとするときに非常な困難を感じることがあった。その上、書かれた記録はそれを読む者との関連においても、さまざまな問題を提示してくれることになる。記述行為の主体である保育者自身が記録を読み返す場合もあれば、第三者がその記録を読むことにより、保育者本人と記録に含まれる子どもたちとの間で生成された関係や保育的な応答の足跡、子ども自身のありようを読みとり、解釈していくこともある。

現在、私は幼稚園の一教諭として、保育実践を文字化する作業に未だに苦労し続けている。忙しい毎日の中では情けない位、貧しい内容の記録しか記すことができない。今日の一人ひとりの行為に思いを馳せ、明日からの保育を考えるゆとりのないままに次の日が来てしまうことも多い。それでも何かしら心に残った出来事や、後になってでも突っ込んで考えてみたいこと、反省すべき自分の言動などについては記述しておきたいと願う。保育は、実に眼に見えにくい繊細な配慮、眼差しのもとで行われる、因果関係のように具体的

な成果を見出しづらい営みであると思う。だからこそ、人間としての基盤を築きながら生きる幼い人達の混沌さ、意味不明さの傍らにあってともに生活し、考え続ける価値がある。

今や、保育者を目指す十代の学生たちの実習日誌なるものを読ませてもらいながら、その日その場で流れ去ってしまう自分の保育の実際と体験、そして記録について再び考え始めている。

（洗足学園大学附属幼稚園）



子どもたちへのまなざし (11)

フックト オン クラシックミュージック

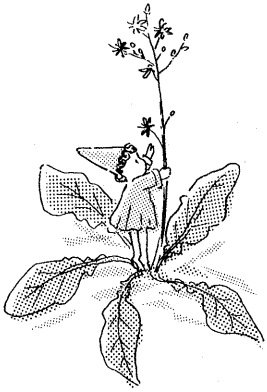
松井　とし

クラシックの名曲が次々とつながって流れ出てくるこのレコードを耳にするたび、子どもたちとの躍動感に満ちた日々が思い出される。

思わず身体が動き出してしまうような軽快なメロディーに合わせて演奏すると、リズム楽器だけの演奏も、とても立体感のある楽しい音楽になった。「ここは太鼓だけで…」とか、「ここは、すずとトライアングルがいい」等と、子どもたちが曲想と楽器のイメージを結び付け、自分たちでアレンジしていた。

入園当初から慣れ親しんだこのメロディーに、歩く、走る、跳ぶ等、日常的な身体の動きを振付け、年長の運動会で踊った。

音楽の大好きだったA男は、卒園記念のアルバムの表紙にいろいろな楽器をもったたく



カット・佐藤和代

さんの友だちと合奏している絵を描いた。デュフィーの作品にも似たその絵には、みんなで音楽を創り出す楽しさが満ちていた。

子どもたちの心に日々の生活を委ね、子どもと共に生活を作ることができるようになった頃からだろうか。保育の日々がまるで生きているかのように変化し、その中で予想を超えたさまざまな出会いが生み出されることを実感できるようになった。

ひとつの活動が次の楽しみを生み出すきっかけとなり、しばらく潜行していた活動は形を変えて、また新たな充実に蘇る。

たとえばお店やさんごっこをするという目的が先にあって、その準備のためにものを作るということではなく、作る楽しみがあってそのことに熱中する。

一心に取り組む過程で次々と生活が広がり、思いもかけなかったことが生み出される。一人ひとりの日常的な充実感が新たな楽しみにつながり、広がっていく。こうして、活動のスパンが従来よりずっと長くなり、生活が自然に流れるようになった。

クラシックの名曲が次々と流れ出てくるこのレコードは、「今日はどんなことに出会えるだろうか…」とわくわくした、あの頃の心の高まりを象徴的に思い出させてくれる。

（元・幼稚園教諭）

ある日の育児日記から

(50)

佐藤　和代

圭は五歳半。やっと、自転車に乗れるようになりました。

「補助輪はずして！」とせがまれること三か月。近所は交通量が多いからまだまだ危ない、と心配していた敬（お父さん）も、ついに根負け。補助輪をはずしてくれました。その日からさっそく練習。子どもなら一日で乗れるかな、なんて予想ははずれ、二週間近く、練習につきあわされてしまいました。

それでもようやくスイスイ乗りこなせるようになったので、次の週末はみんなでサイクリング。

これがなかなか楽しかった。誰がかって、私がです。だって、今までは、家族でサイクリングといえば、私の自転車に圭と有と荷物をのせてエッチラオッチラ、だったのです。敬の自転車はマウンテンバイクなので、子どもも荷物もつめない。ずるいなあ…。それがこの日は、荷物の中で一番重かった圭をのせなくていい！　荷物はゆったり置けるし、有ひとりならこぐのも軽い軽い。こんな楽なサイクリング、久しぶり。

子どもが成長するって、こういうことだったのね。ひとりひとり、親の〝荷台〟から降りていくのね…なんて、妙に感動してしまった一日でした。

前のカゴに人形のせて「通園ごっこ」です。

ラオスの子どもたち

インタヴォン・チャンタソン

アジア、アフリカというと、皆様は何を連想するだろう。返ってくる返事は、きっと、人口が多くて、きたなくて、飢餓がひどく、治安が悪い、未開なところ、などというあたりだろう。皆様だけではない。日本に長く住む私でも、もしアジアに行ったことがなければ、新聞やテレビなどで報道された情報だけ見ていれば、片よったアジアのイメージしか持っていなかったかも知れない。

ところが、現実には、いろいろなところ、町や村々に旅してみると、本当にさまざまな文化、人種、生活などが生き生きと豊かに営まれているのだ。

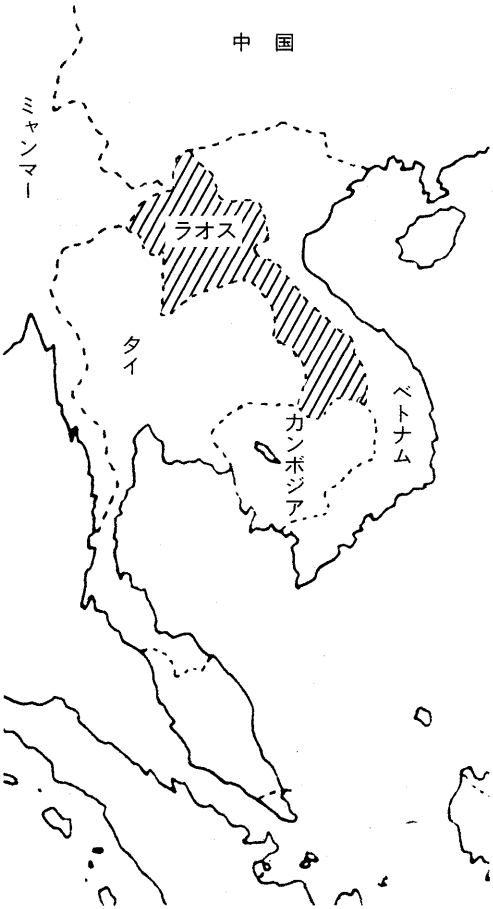
二十年も日本に住んでいると、体や感覚の半分が日本化され、アジアに対して、だんだんと日本人と同じ見方をするようになってくる。幸か不幸か知らないが、自分の意志と関係なく、知らず知らず少しずつ、そうなってくる自分が感じられる。

そういうわけで、自分のアジア的な感覚、アイデ

ンティティを確認し、取り戻す作業として、毎年二、三回、自分の心のふるさとであるアジア、特に、自分の生まれ育った国のラオスに帰る。

毎年何回か帰っても、ラオスのことをぜんぶ知ってはいないということを思い知らされる。しかし、現在、「ラオスの子どもに絵本を送る会」と「ラオスの女性とともに仕事を作る会」というボランティア活動をやっている関係で、自然に子どものことや女性のことに目がいってしまう。

ラオスと言っても、どこにあるか、どういう国なのかなどについて、なかなか知られていない。これからアジアをもっと知るために、ラオスの国のことやラオスの人々、子どもたちの生活についてのべてみたいと思う。



▲五つの国に囲まれた山合いの国ラオス

ラオスは、東南アジアの中央にあり、北に中国、東にベトナム、南にカンボジア、西にタイとミャンマーに囲まれた、日本の本州と同じぐらいの山がちな小さな国である。ラオスの人口は四二〇万人しかいないが、総人口のうち、ラオ族、モン族、黒タイ族、赤タイ族など七〇ぐらいの民族によって、構成されている。それぞれ、独特の文化、言語、服装などを持っている。国土のほとんどが山や森林で覆われ、豊かな自然を提供してくれると同時に、それぞれの地域を隔離し、行き来する道路もないまま、基礎的な教育である小学校の五年間でさえも普及されていない。そうした理由から、同じ国にいても、言葉が通じないことはめずらしくない。

◀少数民族、モン族の娘

ラオスの国民の99%が小乗仏教を信仰している。そして、国民の95%は農業を営んで自給自足の生活を行っている。専業農家の他に、国家公務員として働いている人たちも、農業や他のサイドビジネスをやらなければ、五～六人家族は食べていけない。また農村や町に住む人々の中には、夫や親の収入を手伝うために市場で物売りする妻や、学校に通わない子どもたちが、いっぱいいる。

家族の経済問題に加え、学校、教師、教材が不足しているため、子どもの勉学する権利がうばわれて

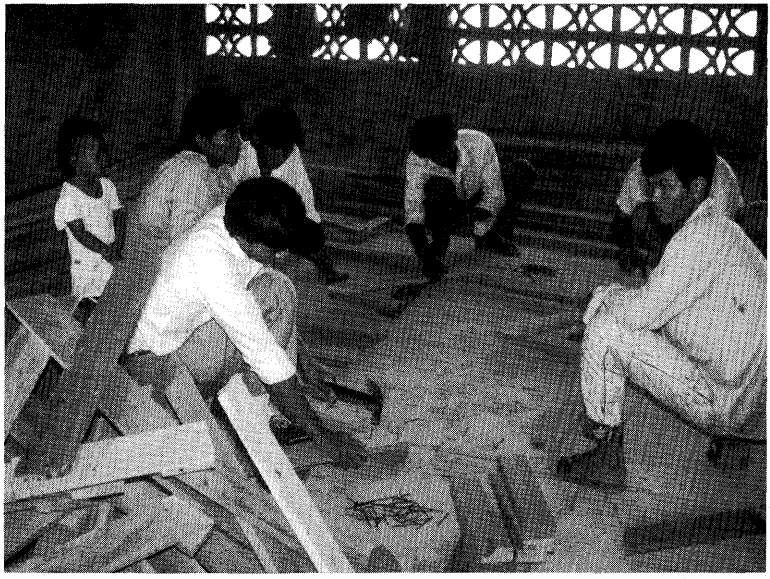
しまう。

一九九〇年から二〇〇〇年まで、全世界から、非識字者（文字の読めない人）を無くそうと、UNESCOが音頭を取って、各国の政府に働きかけた。

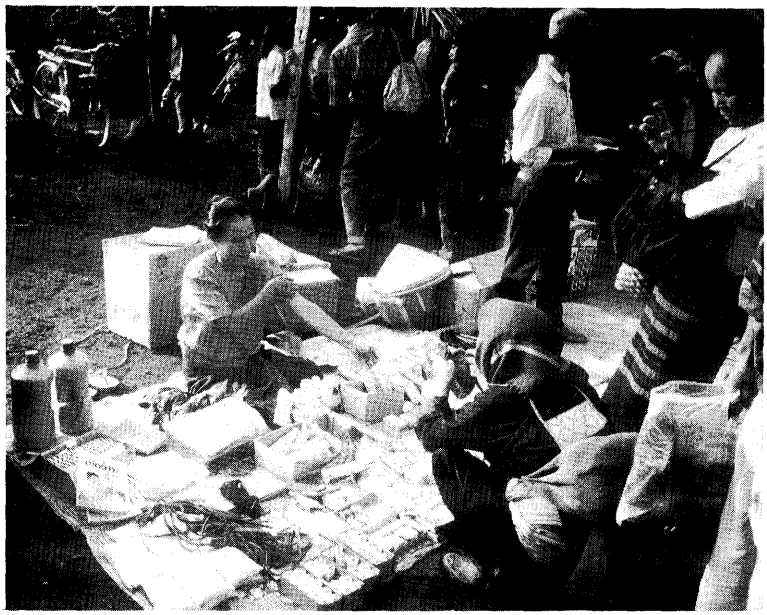
政策上、どの国も立派な計画を企てるが、それを実現させるのに必要な教育環境を整備する膨大な財政や平和がない国が多く、残りの六年間のうちに、とうてい、目標達成は望めそうにないと思う。

たとえば、ラオスのことを例にとってもよく判っていただけると思う。

ラオス政府の政策として、教育を他の事業より、一歩先にと、一九七五年の社会主義革命以後、より多くの子どもに就学できるように、六年間だった小学校教育を五年にへらした。それまで小学校のない村に小学校建設を村の責任とし、校舎ができる村には、政府が教員を派遣してくれることになっている。ところが、農村の収入源のない村では、学校を造ることは、村民にとっては、重荷である。しか



▶村人が自分たちで小学校を造っているところ



◀ベトナム国境近くの市場で。教科書が売られている

し、何とかして、ほったて小屋のような学校を皆で造ったものの、派遣されてきた教師の給料は、毎月県から支払われないため、教師は自給自足となり、一日中、学校で教えていられないか、学校の先生を止めてしまう人も多い。余裕のある村では、村民が自分たちで、先生の給料の代わりに、米や野菜などを提供する。しかし、学校の設備、教材などの不足や給料の不払いの他に、もっと深刻なのは、生活条件の悪い片田舎や山岳地域の少数民族のところに派遣された時に、生活習慣の違い、言語の問題で、教員が行きたがらないため、先生不足になり、一人の先生が二～三教室を同時に見ることもある。

幸運にも、学校もあって、教員もいるが、子どもたちが経済的な理由や、家事、畑仕事などの手伝いのため、学校に来られなかったり、二、三年生で中退したりする子どもも多い。それだけではないが、学校教育の内容が、直接生活に役に立たないため、親や子どもが魅力を感じないし、必要だと思わな

▶お兄ちゃんが妹を保育園に迎えに行く

い。それも子どもが学校に定着しない一つの理由でもある。ある時、ヴィエンチャン市内の貧しい人々の住んでいる地域の学校を見学に行った時に、二十分休みの間に何人かの子どもが、鉄線の塀をのりこえて逃げたところを見かけた。そういえば、どの学校も立派な塀をほしがり、子どもが逃げないように門番のいる学校もある。学校の内容が面白ければ、せっかく来られる学校から逃げるはずがないと思うが、ラオスの教師はそう思っていないようだ。彼らは考える余裕がない。なぜならば、自分たちの生活のことでせいいっぱいである。市内の学校の先生でも、授業が終わると同時に、休みの間は学校内にある店で物売りおばさんになり、授業が始まると、また教員の顔にもどるのである。ある女の先生は、小さい子どもを保育園に預けるお金がないため、子守りをしながら授業をやっている。これらの風景は、ラオスだけではなく、開発途上国では、よく見られる風景だ。

田舎に行けば行くほど、子どもたちには、自分たちの意志だけでは、どうにもならない問題が多すぎて、なかなか簡単に解決できそうにない。

ところが、子どもが多くて、毎日食べることだけで頭がいっぱいで、子どもの教育に無関心の田舎の親と違って、都市にいる人は、数少ない子どもの教育に熱心で、より良くて高い教育を受けさせようと、小学校レベルから、英語塾、補習塾などに通わせ、小学校五年が終わると、中学校、高校に進学させ、大学まで行く人も増えてきた。

一九八六年に、社会主義国のラオスに自由経済が導入されてから、事業に成功し、生活に余裕のある人は、少しではあるが、増えている。彼らは、日本の親と同じように、より良い教育を期待し、少しでも長く教えてくれる私立学校に通わせるようになった。私立学校によっては、一か月分の国家公務員の給料よりずっと高い授業料の学校もある。また、町ではタイや他の外国から輸入されたものがあふれて

◀国でたった一軒の国営書店。本棚には本があまりない

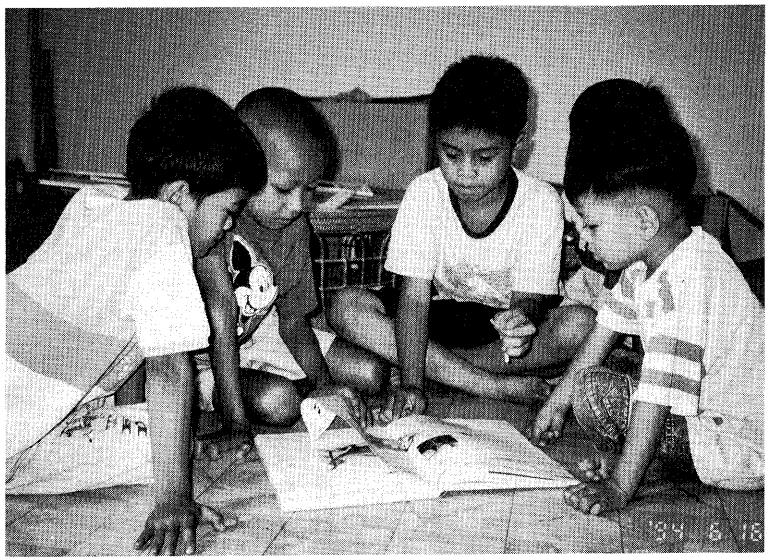
いる。それに加えて、タイTVの電波にのって、日本の商品のCMは、日本で発表されるのと同時にラオスでも情報をキャッチすることができる。ほしい物を買うことのできる人にとっては便利でいいが、貧しい人々にとってはすごい情報の暴力でしかないと思う。

お金のある人が、日本の子どもが持っている物と同じ物、たとえばテレビゲームや高級なマウンテンバイクなどを買って与えることによって、それまで、皆平等で手作りのおもちゃで遊んでいたのが、今は、高価なおもちゃを持つ子を頂点に、子どものピラミッド型の付き合いができてしまう。

自由経済のかげで、貧富の差が少しずつ広がっている。毎日のように、日本や世界の新製品の情報が、電波から流れてきて、大人や子どもの欲望を刺激し、永遠に満たされない欲望が人々を失望感に落とし入れる。その欲望を満たすために一生懸命働く人もいれば、犯罪を起こす人もいる。こういう環境の中に子どもたちが置かれているため、いつ犯罪を起こすかわからないという危険性にさらされている。

このアンバランスな社会体制の中で、子どもの健全な成長を確保するため、社会全体に、もっと広く言えば、世界全体に、子ども一人ひとりのあたりまえの権利としての教育権、生存権を守らなければならないと思う。

そういう目的のため、微力ではあるが、少しでも子どもの教育環境の改善になればと、「ラオスの子どもに絵本を送る会」は、不足している教科書の代わりに、少しでも文字にふれて文字を忘れさせないために、絵本やラオスの昔話の本を作って、農村の小学校や中学校に無料配付している。そのかたわら、町の子どもたちの興味を、少しでも物質からとおざけ、精神的、文化的価値感に興味を持ってくれるように、ラオスの文化庁に協力して、町の中心地に、子どもが、本を読んだり、絵をかいたり、図工



▶「絵本を送る会」ラオス事務所の図書室で

を楽しんだり、音楽に親しんだりしてもらうために、子ども文化センター（日本でいうと児童館のようなもの）を運営している。

この活動を通して、子どもたちが、自分たちが自分の言葉で自分たちの主張を表せるようになり、自分たちの文化を形成し、自分たちで自立していく力を身に付けてもらえたら、これ以上のしあわせはないと思う。

（ラオスの子どもに絵本を送る会代表
ラオスの女性とともに仕事を作る会代表
東京都国際理解教育派遣講師
外務省語学研修所非常勤講師）

＊現在「絵本を送る会」では、ラオスの子ども用の初の絵解き辞書を作っており、小・中学校に無料配布する予定で募金をつのっています。

編集後記

今月の「子供讃歌」はラオスの子どもたちの写真です。本文を書いていただいたチャンタソンさんに提供していただきました。自分の頭より大きな頭の妹（弟？）をおんぶして遊ぶ女の子。半世紀ほど前まで、日本でもよく見られた光景です。この子どもたちの瞳の輝きは、この何十年かの間に、日本が無くしてしまった何かを思い出させてくれませんか？　本当の豊かさとは、何なのでしょう。

＊

こだわりの逸品とか、こだわりを持って一つの作品に打ち込む、など職人や芸術家の世界のように、個人に対する評価がそのまま認められる社会では、こだわりは良い意味で受け入れられています。しかし、世の中全般を見てみると、こだわりを持つことは、人とちがう意見を持つこと、流れに逆らうことであり、時にはものすごい反撥のエネルギーにもなります。それは決して生きやすいことではないようにも思えます。保育や教育現場の子ども達についてはどうなのでしょう。こだわりのある子は、大人たちにとって、どうも扱かいにくい存在だ、ということはないでしょうか。集団の中で、適応力をつけたり、気持ちの切り替えということも必要なのでしょうが、保育者自身が何にこだわり、何を大切にしていくかという、選択力を持っているかどうかが、問われているのではないでしょうか。　（K）

幼児の教育

第九十四巻　第二号
（一九九五年二月号）
定価四五〇円（本体四三七円）

発行　平成七年二月一日
編集兼発行人　本田和子
発行所　日本幼稚園協会
〒112東京都文京区大塚二―一―一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
印刷所　図書印刷株式会社
〒108東京都港区三田五―一二―一
発売所　株式会社　フレーベル館
〒113東京都文京区本駒込
六―一四―九
☎〇三―五三九五―六六〇四
振替　〇〇一九〇―二―一九六四〇

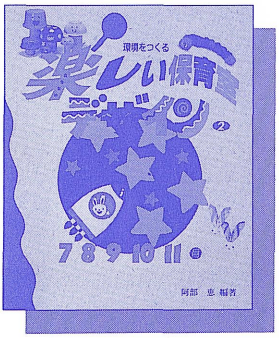
☆　本誌ご購読のご注文は発売所フレーベル館にお願いいたします。

☆万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりかえいたします。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン①

4・5・6月

楽しい保育室から楽しい保育へ。新学期に必要な誕生表や案内標示、くつ箱やロッカーをわかりやすく飾りつけるアイデアを盛り込みました。また、プレゼントやワンポイント的に生きてくるアイデア飾りも各月別に、かわいいモチーフで作りました。オールカラー・型紙付。



環境をつくる 楽しい保育室デザイン②

7・8・9・10・11月

暑い季節は、涼感を呼ぶ室内飾りが何より。季節感を大切にした室内飾りのアイデアをワンポイント飾り、壁面飾り、コーナー飾り、おすすめアイデア飾りにしぼって、提案します。
赤ちゃん向きと、幼児向きのバリエーションなど細かい配慮もしています。オールカラー・型紙付。

環境をつくる 楽しい保育室デザイン③

12・1・2・3月

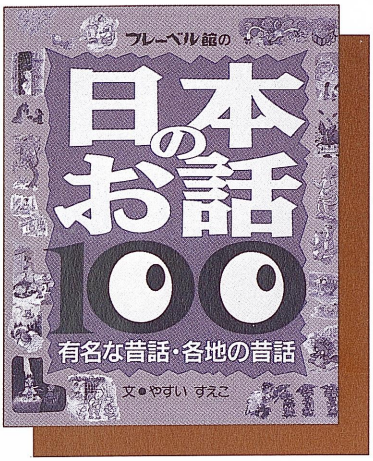
12月はクリスマス会などのパーティーグッズのアイデア、3月は、卒園を祝う飾りやプレゼントのアイデアを加えました。
各月のどのアイデアも、子どもといっしょに作ったり飾ったりできる簡単な作品です。楽しみながら作り、飾って楽しむアイデアの提案です。
オールカラー・型紙付。

阿部　恵・編著　AB判・各80頁・オールカラー・型紙2色

定価各2,300円(本体2,233円) セット定価6,900円(本体6,699円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

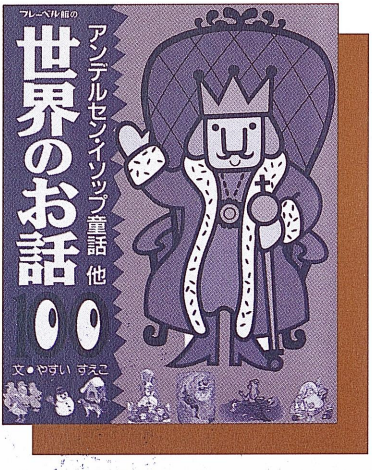


日本のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(日本版)。「さるかに」「かちかち山」「うらしま太郎」「こぶとりじいさん」「したきりすずめ」他。
- 一話一話を読みやすい長さにまとめ、美しい挿し絵をそえました。
- 子どもたちの心を育てるお話の宝石箱。

文・やすい　すえこ　絵・若菜　珪／石倉欣二　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)



世界のお話100

- 子どもたちに読み聞かせてあげたい100のお話(世界版)。アンデルセン、イソップ、ヨーロッパの民話他。
- 文化の歴史が時間をかけて培ったお話が、子どもたちの感情を育てます。
- 美しい挿し絵。読み聞かせしやすい文章の長さ。

文・やすい　すえこ　絵・村上　勉／太田大八　他

A4変型判・352頁・定価2,200円(本体2,136円)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)5395-6608にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館